

## 歳月を経て

刑を終えたAさんは今

先日、久しぶりに同級生のAさんに会いました。

あれから何年の歳月が過ぎたのだろう。Aさんにとって思い出したくないであろう、人の命を奪ってしまった事件。そして、獄中では、犯した罪に対する悔恨、自己嫌悪、命を奪ってしまった人への祈りの日々。苦しみ抜いた獄中の生活を終え社会へ戻ったAさんは、手に職を付けようと専門学校に通い技能を身につけました。今はその技能を生かし仕事に励んでいます。

罪を償い出所して十年余り。そのAさんが、私に対して重い口を開いてくれました。「俺は思い出したくないよ。それが本心だ。今の俺の生活や行動を見てほしいんだよ。今、精一杯やっている、ありのままを理解してほしいんだ。『昔こうだった』でなく、今を分かってほしいんだよ。今また何かすれば、『昔、罪を犯した人だから』と思われてしまう。俺の過去を知っている人は大勢いる。でも、知らん顔をしてほしくない。俺は隠すつもりはないよ。あえて言おうとは思わないけど、相手に壁をとってもらおうとは思っていない。俺がオープンになることでまわりもオープンになるんだよ。俺は、これからも元気に声をかけるから、応えてほしいんだ。確かに『自分』を意識しないわけにはいかない。でもまわりが、そういう人だから何かしてあげようとか、つき合っただけでいいんじゃないか、違うよね。」

Aさんは、現在地区の役員をしているそうです。

「明日は、役員の仕事があるんだ。役を通して、地域に貢献していきたいね。自分が閉じこもれば、相手も過去を引きずっていると見るだろう。だから、胸張って地域の仕事もしていきたい。自分から地域に出ていく積み重ねで、偏見もなくせると思うんだ。」と、Aさんは語るのです。

酒も入り、学生の頃のこと、そして家族のことに話が進むと、Aさんがこう言いました。

「俺も結婚したいとは思うんだ。家族をもちたいな。子どもを育てる苦労をしてみたいよ。自分が生きてる役割って言うか、使命みたいなものかな。自分の人生に納得したいのかもしれないね。」

Aさんは、出所してすぐ好きな人ができ、結婚まで考えたそうです。でも、親や親戚の猛反対を受け断念したそうです。親も親戚も世間に対して負い目を感じていたことも事実ですが、Aさん自身もまた、負い目があったのです。

「今は少し変わったよね。俺、自分が閉じこもってちゃいけないと思うんだ。今生きてる。そのことを大事にしたいんだ。それから、刑を終えたからといって、罪を償ったとは思っていないよ。これから、俺自身が一生懸命生きることが償いだと思ってる。」

それから私とAさんは、しばらくの時間、あの共に通った学生時代の思い出を肴に、ほろ酔い気分で盃を重ねました。Aさんと別れて帰路についた私は、静かに自分自身を問い返しました。